

# サンタむちゅめ襲来っ

1

突如、巨大なサンタ姿の少女が街に現れた。巨大サンタ娘は街をぐるりと見渡す。彼女の膝くらいのビルが乱立し、その隙間を縫うようにして高架の道路が走っている。

その高速道路にサンタ娘は近づく。高さは向こう臍くらい、幅は車線四つ分で彼女の肘から上と同じくらいか。何台もの車が走っており、サンタ娘はその一つを止めてようと手の平を車線上に置くが、車は手の平に当たると高い音を立てて歪み、ひしゃげ、そして炎上した。

信じられないと言う面持ちで自分の掌と燃えている自動車を交互に見るサンタ娘。『おもちゃの車』がこんなに繊細だとは思わなかったのだ。となると別の方法で車を止めなければならぬ。彼女は右足をあげて道路に降ろす。力を入れたつもりは無いのに、軽く足を乗せるだけで高架は軽い音を立てて崩れ落ちた。

崩れた部分近くを走っていた数台は急ブレーキを掛ける

ものの、止まりきれずに奈落へ……しかし、サンタ娘は落ちる前にその数台の車を右手ですくい取り、そして左手の袋へと入れる。幸いサンタ娘が破壊した場所は見通しが良いため最初の数台以外に奈落に落ちる者は無かったが、奈落の前で止まることこそサンタ娘が望んだことであり、拾い上げられて袋の中に突入させられることには代わりがない。五台に一台くらい（軽自動車の殆ど）は、掴んだ拍子にフレームが大きく歪んだためそのままうち捨てられたが。

初めは台数を競うように集めていたサンタ娘も、十分な台数を集めると今度は珍しそうな車を集めに掛かった。まずは先ほど潰してしまった軽自動車。右手の親指と人差し指で慎重に前輪を挟んで持ち上げ、そのスペースに左手の指を入れる。そして右手で車両後部を押し、左掌に押し上げる。（こうすれば、小さな車でも大丈夫ね）

サンタ娘は戦果を見て上機嫌そうに微笑む。既に乗員は車を捨てて逃げてしまっていたが、そんなことはお構いなしだ。

その後もまた手の届く範囲にある珍しそうな車を物色する。大型車の天井を鷲掴みにしてそのまま袋に放り込む姿は小人達にどう映つたのだろうか。連結付きの大型トレーラー、土を積んだダンプカー、くるくる回る筒を抱えたトラック……

そのとき足下からなにか大きな声がしたので、反射的に下をのぞき見る。すると赤い光を抱いた車が十数台ほど彼

女の足下にあり、その開かれたドアの影に小人がしゃがみつつか細い腕を彼女の方向に向けている。そして先頭には何か口に当てた男が一人立っている。

(あ、これって……)

パトロールカーだったはず。赤い回転灯もさながら、『正義の味方』が乗っている車なので男の子に人気がある車だ。

「その巨人……」

制止しようと声を出した警官の台詞が止まった。突然巨人がしゃがみ、手を伸ばしたからである。腕は彼の遙か頭上を越えて後方の車を掴み、そしてそのまま左手に持つ袋に放り込んでしまった。

号令ではなく恐怖心から一斉に発砲する部隊。しかし、その銃撃を全く感じないサンタ娘には、手に持つクラツカーを妙に厳しい表情で鳴らしているようにしか見えない。かくして人気商品のパトカーは残らず袋に入れられてしまい、唾然とする警官隊を意に介することもなくサンタ娘は次なる目標のため地響き立てつつ歩み去ってしまった。

さて、覚えている範囲では大概の車種を集めたため、サンタ娘は懐からメモを取りだし袋の中身と比べ始めた。予想通り、リスト中の車の項にある車種は概ね集め終わっているが、ざっと見た感じでは消防車とタンクローリーが残っている。どちらもありストの下の方にあるから珍しいか欲しがる人が少ないのだろう。注釈として絵が添えられている

から間違えることは無さそうだ。

そういえば、この絵に少し似た車両を拾った記憶がある。サンタ娘は袋の中に手を突っ込んでコンクリート運搬車を取り出し、

「これって、タンクローリーですか？」

と運転手に尋ねる。

「？」

恐怖もあり、問う意味を全く理解できない運転手。答えてくれないので、サンタ娘はもう一度図面と車を比較してみた。円筒状のタンクがついているという点では似ているが、その筒の形や傾きが随分異なるように思える。それに、灰色に汚れた車は正直言ってあまり人気があるようには見えない。

「ん、じゃあ要らないか……」

サンタ娘がつぶやくと同時にいきなり車が傾き、運転席からも数十メートル下の地面が見える。

(落とす気かっ！)

運転手は慌ててドアを開け、ドア後部の梯子から回転体の基部まで移る。巨大娘の指にしがみつけば何とかなるかもしれない。

しかし、この運転手の必死の行動も、車を適当な場所に置こうとしているサンタ娘にとっては不可解なものにしか見えない。

「なにしてるんですか？　そんな所にいると落ちますよ」

凶面を持った左手を車の少し下に沿え、サンタ娘が注意する。驚いて振り返った運転手の視界一杯にサンタ娘の怪訝そうな表情が広がっており、視線はこちらの方に注がれている。双眸だけで彼の胴体くらいはあるだろうか。

「あ、あわ、あわわ……」

後ろは車体であると頭では解つてはいるのに、足が勝手に後ずさりしてしまう。動かぬまま三歩後ずさつたところで、足を滑らせた。肩胛骨をしたたかに打ち、あとは奈落へ……

どきっ

(?)

一卷の終わりと思つて目を固く閉じていた運転手だが、意外に早く柔らかい地面に落ちる。疑問に思いつつも恐る恐る目を開けると、先程と同様彼の目の前に娘の顔が広がっている。

「まったく、なにやってんの」

ややぞんざいな口調でサンタ娘は問う。

「な、何やってるってな」

運転手は思わず怒声を返すものの、背中が痛いのか直ぐにうずくまつてしまう。

サンタ娘にとつて助けた相手に怒鳴られるのは意外だし少々不快でもあるが、それよりも自分の小指ほどもない小人が必死になっている様が可愛い。

「怒らなくてもいいでしょ、無事だったんだから」

軽く微笑みながらそう返し、そして問う。

「それより、タンクローリーって車の場所を教えてください」  
「どうやら答えずに済みそうにはない。まあこの状況で自白したからと咎められもしないだろう。そう彼は判断したが、一つだけ引つかかることがある。

「タンクローリーを探して何をするんだ?」

「何をつて、プレゼントにするんです。変な使い方なんかしませんよ?」

何が気に障つたのか解らないが、口をとがらせて反論するサンタ娘。『変な使い方』って何だろうかと運転手は思ったが、何となくそれを問う気にはなれなかった。

運転手の話によると、タンクローリーはガソリンスタンドというところによく居るのだそうだ。「たとえばあんな」と言いつ彼が指さす先を見ると、白く波打つ屋根だけしかない奇妙な平屋がビルの谷間にある。

「あの、黄色い看板の建物がそうなの?」

「ああ、タンクローリーがいればケツがはみ出るから分かるだろう」

余り品の良くない返答に、サンタ娘の眉間に軽く皺が寄る。だが彼女は少しの間視線を逸らしたかと思うと突然運転手にっこり微笑みかけつつ、

「ありがとうございます、じゃあ貴方と車を戻しますね」と言う。それから彼女は軽くしゃがんで膝の高さにあるビル

の屋上に車を置き、運転手を乗せた左手をビルの屋上に置いて傾けながら右人差し指で運転手を支えてそーっと地面に下ろす。

「では、お大事に〜」

にこやかにそう言つて、サンタ娘は屋上で啞然としている運転手を後目に歩み去る。

コンクリ車を屋上に残して。

サンタ娘はガソリンスタンドを探して右往左往。広い道を選んでいるため周りの建物こそ無事だが、歩いている途中に道路の所々を陥没させ、また乗り捨てられた車を何台か踏みつぶしてしまうのはどうしようもない。

幸いにして銀の筒が突き出たガソリンスタンドは数ブロック歩いただけで見つかった。喜んで駆け寄りしゃがんで頭を垂れ中を覗き見ると、彼女の予想通りそこには凶に描かれたとおりのタンクローリーが二台鎮座している。しかし、その一台を掴もうとすると、思ったより弱い銀色の筒は彼女の握力に追従してひしゃげ、中の液体を飛び散らせた。

引つ張り出してみると銀色の筒の部分は完全に潰れており、さらに自重のため彼女の目の前で車体が折れ曲がってしまった。筒の中に入っている液体は慣れない身には頭の痛くなるような悪臭を放っている。

「ひっどーい……」

思わずそんな声が出てしまう。相当に腹が立ったものの、ま

ずは任務が優先と気を取り直す。残骸を投げ捨てる、サンタ娘はもう一台とめられているタンクローリーの後輪を右手で挟んで慎重に引つ張り出し、そして左手で前輪を挟んで持ち上げ、置いている袋に入れる。

ここでの任務は終了した。もう用はないし、人も居ない。サンタ娘は立ち上がると、悪戯っぽい笑みを浮かべつつ左足を隣のビルと同じくらいに高く振り上げ、そして全体重を掛けて振り下ろす。

「てやー！」

ぐしゃっ

サンタ娘の靴の一撃はガソリンスタンドの屋根を踏み抜き、給油ボックス四つを完全に圧縮してコンクリートにまでめり込む。再び足をあげると、平坦な屋根に見事なまでにくつきりと足跡ができていた。

建物が殆ど抵抗無しにあっさりと変形する様には優越感を禁じ得なかったが、先の悪臭がさらに強くなってきたため早々に立ち去ることにした。しかし二〜三步後ずさったところで不意にガソリンスタンドから小さな火花が出たかと思うと、いきなり炎が燃え上がる。炎の高さは最初彼女のくるぶしの高さだったが、すぐに腰の高さまで来る。

(うーん、やりすぎちゃったなあ)

このままで火勢が大きくなると小人たちには対処が難しいかもしれない。サンタ娘は自分の持つている袋を広げ、そし

てガソリンスタンドに掛ける。こうすれば酸欠で火勢が弱まるだろうし、また待っていたら消防車が来るかもしれない。

最初に来たのはヘリコプターで、サンタ娘の手の届かないところからなにか薬剤のようなものを散布しはじめた。その後すぐにそこかしこからサイレンの音が聞こえてくるが、近くに来たかと思うとサイレン音は消えてしまい、彼女の足下はおろか視界の範囲内にさえ一台もやって来ない。

自分がここに居る限りは来てくれないのではないだろうか。そう思ったサンタ娘は袋を地面からそうっと取り、やや慎重にガソリンスタンドから離れる。少し離れたところで下を見ると、案の定というか交差点のビル陰に消防車が待機していた。

慌てて後退しようとする消防車。しかしサンタ娘は容赦なくその後ろを抑え、前面の土台に右手の指を滑り込ませて軽々と持ち上げる。

「ごめんね、一台だけにしてあげるから」  
につこり笑って運転手にそう言うと、彼女は地面に置いていた袋に消防車を放り込んだ。

リストもほぼチエックで埋まり、あとはバスと電車を残すのみとなった。男の子にはもちろん、なぜか女の子にも人気のあるおもちやであり、両方とも駅に行けば入手できると記されている。サンタ娘は駅とおぼしき建物が無いか周囲を見回す。今まで下の方ばかり見ていたので気づかなかつたが、改めて見回すと最も高い建物でさえ彼女の腰までしかないため街を一望できることがわかる。彼女の尺度で右手前二、三十メートルほどのところに高い建物が密集しており、恐らくそれが駅を含む街の中心なのだろう。

目標が解れば早い。道が広く閑散としていていることもあって、サンタ娘は下を気にせずずんずんと目標に向かって歩く。途中の道を陥没させ、乗り捨てられた車を何台も踏みつぶしてしまつたが、それは程度の差こそあれ今に始まつたことではない。

なるべく広い道を選んだので少し迂回したが、そのため乱立するビル谷間にある高架の線路を早く見つけることが出来た。嬉しくてつい駆け寄ろうとする。しかし、三歩目で何かを踏み抜いたと思つたらその右足が彼女の意志に反して突然後ろに滑る。

重々しい地響きと激しい揺れが周囲を襲う。舞い上がった埃がまだ漂うなかサンタ娘は上半身を起こして周囲を見回してみる。目の前の高架は無事のようにだ。へたに手を前

に出したりしなかつたからだろう。後ろを振り返ると、さつき踏みつけたと思しき車が無惨な姿を晒している。

改めて高架を見てみると、線路がカタコトという音を立っている。電車が近いと思つて左右を確認するが、ビルに隠れているため右から電車が来ていることしか解らない。立ち上がって確認することも出来るがそれよりこのまま待ち伏せする方が良いと判断し、サンタ娘は高架脇のビルの陰に身を隠して電車の到来を待つ。

カーブを抜けると制限速度解除の標識があるのを知っている運転手は、すぐ加速を最大限に引き上げる。巨人の出現区域から人を遠ざけるため、この地域に近づく電車は全駅通過という大胆なダイヤグラムで運行されている。普段からこの路線を運転してきた熟練の運転手にとって、曲がりくねつたこの路線を高速かつ全駅通過で走るといのは痛快ながら非常に神経を磨り減らす作業だった。

すぐにまたカーブを迎え、彼はブレーキレバーを捻る。急制動で文句を言う乗客もいない。目標の駅まではカーブ二つを挟んで数百メートル。ここで駅まで減速するか、それともぎりぎり一杯まで加速するか……

運転手の余り意味のない悩みを吹き飛ばしたのは、前に広がっていた光景だった。運転手の左前方、席からそう離れていない位置に妙に生々しい色の屋根らしきものが待ちかまえている。本能的に危機を察知した運転手は、反射的に加

速レバーを力一杯捻っていた。

徐々に高まるモーター音をもどかしそうに聞きながら、運転手は正面を向いたまま視線だけを左に動かす。目に映ったのは巨人の掌と白いふわふわした袖口、そして赤い袖。やつと運転手はそれが巨人の掌であることを理解した。差し渡し十メートル位はあるだろうか、その大きさに比べて自分の乗る電車のなんと小さく遅いことか。十一両の電車が通過するのをあの巨人は指をくわえて見逃してくれるのだろうか……

その次の瞬間、運転手は突然前のめりの力を感じ前面のガラスに額を強打する。目の前が真っ暗になり一瞬だけ意識が飛ぶ。そして気がつくと前方には白い袋が暗い口を開けており、その口がかなりの速度をもって彼の方に迫っている。思わず顔を逸らす運転手の耳には今度は車輻の軋む重い音が入ってくる。後ろを振り向けば彼の乗る車輻の半ばを覆い隠す……肌色の……指？

サンタ娘は右手で先頭車両を摘んで徐々に速度を落とし、それから車輻を少し傾け軽く脱線させたまま電車の推力を利用して慎重に左手の袋へと流し込む。十両以上の編成を持つ電車をこのように袋へ導くのは非常に神経を使う作業だが、どうにか架線を切ることなく袋へ収めることに成功した。彼女はほっと安堵の息を漏らす。練習では失敗も多かったが、これならなんとかなりそうだ……

これだけ大きな街だから直ぐに次の電車が来ると考えていたが、待つていてもなかなか次の電車が来ない。仕方がないのでサンタ娘はひとまず駅を目指すことにした。高架を跨ぎ越し、大通りを更に進む。そして二ブロックほど進んだ十字路を左折すると、駅前らしき看板の群れが広がっている。駅前広場の向こうからバスが走ってきており、どうやらロータリーに入ろうとしているようだ。サンタ娘は数歩で詰め寄ってしゃがみバスを掴もうと手を伸ばすが、すんでのところでバスは急停止し、さらに後退する。

「あつ……あゝ」

ちよつと面白くなさそうに口を尖らせるサンタ娘。しかし、必死でハンドルを操作している運転手や彼女と目を合わせないよう身を縮めて震えている乗客、そして人で一杯になっている車内の様子を見てしまうと、このバスを無理に掴むのも悪いように思えてくる。彼女はひとまず身を起こし、「どうぞ」

と言つて先にロータリーに入るよう手で合図を送る。

しかし、バス内の状況はサンタ娘が察した以上に逼迫していた。乗客で詰まった車内のあちこちから悲鳴と怒号があがるなか運転手は必死でバスを動かそうとするが、ギアを入れてもアクセルをふかしても全く動く気配がない。さっきの急制動でクラッチがいかれたのだろうか。さらにアクセルを踏み込んでギアを繋ごうとするが、バスはどうしても

動いてくれない。

「早く走れよ！」

「たすけて！」

「もう駄目だあ！」

そんな声が彼の後ろから突き刺さる。その中に混じっていた「ドア開けるお」という声に運転手は反応してしまい、反射的に前後のドアを解放してしまう。すると乗客は一気に出口へとなだれ込んだ。

(ここで出しても大丈夫なのか?)

後悔しても遅い。サンタ娘に攻撃されないか不安に思った運転手が手前に聳える赤い壁のずつと上を見やると、巨大サンタ娘が少し意外そうな表情を浮かべ彼の居るバスを見ていた。目が合ったと感じ、運転手は慌てて体を引き直り駅の方をみると、不意にサンタ娘の顔が正面に落ちてくる。

「！」

運転手は反射的にのけぞり、後頭部を強く打ってしまった。残っている乗客からも短い悲鳴が上がり、降りることも出来ず身を縮めている。

「どうしたんですか？」

緊迫した車内とは裏腹に、サンタ娘の表情と問う声は穏やかだ。しかしそれで彼らの緊張がほぐれるわけでもない。運転手の頭の中では、これは自分に対する問いなのか、そして

どう答えればよいのかという無為な考えだけが空回りしている。外のサンタ娘にも、ハンドルを握ったまま目を見開いて何やら呟いている運転手の姿から答えを返せる状況に無いことは臆気ながら解る。

(そこまで怖いなら逃げれば良いのに)

完全に混乱しているのだろうか、それとも逃げられない状況なのだろうか。そういえば、このバスからは高いエンジン音とともに時々「ガガッ」という何かが噛み合うような音が響いていた。

「もしかして、動かないとか？」

視線を再び運転手に戻し問う。運転手は必死でギアを操作し、どうにかバスを動かそうとしているようだった。そしてその動作に反して留まったままのバスが、彼女の推測が当たっていることを如実に示している。

「動かないバスなんて要らないのよねえ、もお……」

不満そうに呟き、サンタ娘が上半身を引いて立ち上がると、残っていた乗客と運転手はその隙を利用してバスの出入口に殺到する。今になってバタバタと降りる乗客をサンタ娘は暫く上から見ていたが、上空からの視線に気づいた乗客が悲鳴を上げて散り散りに走っていくのを見て、あまり注視してやらないほうが彼らにとって良いように思えてきた。

(そっか、私が気を払わない振りをすれば、小人さんたちはちゃんと逃げてくれるんだ)

彼らの行動心理というやつを理解して、ちよつと得意げなサ  
ンタ娘。動かないバスは放置しても良いのだが、丁度無人で  
もあるのととりあえず確保することにした。

駅前広場にはバスが数台乗り捨てられていた。本当は出  
発しようにもサンタ娘の体に阻まれて出られないだけなの  
だが、当のサンタ娘はお構いなしに全部浚っていく。

その様子は駅のホームで電車を待つ人たちにも見えてい  
る。しゃがんで四肢をついている巨大なサンタ娘によって自  
分達が乗ってきたバスが軽々と、いやむしろ慎重に拾われ  
袋に入れられていく。多くのバスは屋根付きプラットフォーム  
のそばに停車していたが、そのプラットフォームの屋根も  
サンタ娘の指の動きを邪魔することなく一方的にその形を  
歪めている。

あらかたバスを拾い終わったので、サンタ娘はいったん腰  
を伸ばし駅を含む駅前広場をぐるっと一瞥してみる。人が  
多くいるのは駅のホームのようだ。避難のための電車を待つ  
ているであろう人で込み合っている。そこに目を留めると  
それだけで人々が後ずさり悲鳴や怒号いくつも上がったの  
で、慌ててサンタ娘は目を逸らす。

だが、様子がなんとなくおかしい。そう思つて再度ホーム  
を見やると、どうも向こう側で救助作業をしているようだ。  
立ち上がった駅の高架を跨ぎ反対側を見てみると、線路に  
落ちた人を助けようとしているのが見える。

サンタ娘にとつてはそれだけの動作だが、ホーム上の人達  
にとつてはさっきロータリー側に居た巨大サンタ娘がいつ  
の間にか反対側に来て睨んでいる。またもや押し合いが始  
まり、今度は反対側の線路に何人かが落とされてしまう。

彼らの慌てぶりに呆れつつも、サンタ娘は同時に罪悪感  
も感じていた。ここで待てば電車は来るだろうが、彼らが  
乗って逃げるはずの電車である。それを捕まえてしまうと、  
結局この人達は電車が集まるまでずっと彼女に怯えてい  
なければならぬ。

意を決したサンタ娘は再びロータリー側に移動して真ん  
中あたりに座り、さらに前屈みになって肘を膝の上に置く。  
ここまで屈めば高架のホームに居る人たちを見ることが出  
来るし、ホームからも彼女の顔を見ることが出来るだろう。  
そうして、出来るだけ彼らを刺激しないような小さな声で  
話しかける。

「え、こんにちは、クラファと言います」

いきなり名乗るといふ突飛な行動にホーム上の人達が三度  
ざわめき始めるが、クラファと名乗ったサンタ娘はそれに構  
わずいきなり本題を切り出す。

「取引、しませんか？　電車の沢山あるところを教えてく  
れば、ここから立ち去るといふことで」

殆どの人は彼女の話を聞かずに右往左往しているだけだった  
が、その人混みを分けて彼女の前に出てきた駅員が居た。

「そ、その話は本当ですか？」

「ええ」

恐る恐る問う駅員に微笑みながら答え、クラファはホームに手を伸ばそうとする。だが迫り来る巨大な赤い手を怖れた人達が一齐に引いたのを見て手を引っ込める。

「ただ、また道に迷うと面倒だから、一緒に来て案内して欲しいんですけど」

説明しながら見ると、楕円形に引いた人の壁からその駅員だけが抜け出ていた。しばし彼はクラファの方を見ていたが、おもむろに体を横に向けマイクを口に当てて喋る。

「業務連絡。保安用の無線機を持参願います」

その駅員が無線機などの装備を調べている間にクラファは上体を起こし、前屈みの姿勢のせいで疲れた腰を延ばしたり横に捻ったりしていた。一杯まで上体を回すと真後ろが視界に入り、その中に彼女の見慣れない車両がある。

(……なんだろう?)

疑問に思ったクラファが後ろに向き直ろうとして片膝を立てると、それを合図したかのように彼女の尻や背中に何か小さなものがぼつぼつと当たる。向き直ったクラファの前に居たのは数台の戦車だった。砲身を高く揚げ爆竹のような音と共に彼女を撃っているらしいが、彼らにとっては大きな破壊力を持つはずの砲弾も彼女にはくすぐったい程度の感触を与えるのみだ。

「えーっと」

おもむろにクラファは懐から収集リストを取り出し、目の前の車をチェックしはじめた。戦車は自分の受け持ち外だが、なにかの注意事項に記載されていた記憶があったからだ。

自分たちの砲撃を完全に無視している巨大サンタ娘の態度にいきり立った戦車内の兵士達は更に激しい砲撃を浴びせる。砲撃が効いていない上にまだ攻撃が来ないという状況を冷静に解釈すれば今こそ退却すべき時なのだが、巨大サンタ娘の態度に対していきり立った部隊内にそのような進言をする者は居ない。

しかし、そんな激しい砲撃もクラファにとっては煩さを増すだけでしかない。砲弾に紙を燃やされないように手で払いながら読み進めていくと、こんな記述に当たった。

戦車は主に治安維持のため派遣される。

担当者以外は戦車の派遣前に規定の収集を終える

ことが望ましいが、やむを得ない場合はこれらの

収集を許可する。戦車で代替可能な車輛は以下の

通り…タンクローリー(一…一)、電車(二…一)

……

つまり、余り誉められた事態では無いものの、戦車の収集はしても構わないらしい。

そうと決まれば話は早い。クラファはリストを懐に仕舞って身を乗り出し、手近な戦車を掴み上げる。

「じゃあ、皆さんに入って貰いまーす」  
一応そう説明してから、左手に持った袋の中へ戦車を放り込む。

それは見ている者全員にとってあつという間の出来事だった。巨大サンタ娘の突然の転身に唖然とする者、退却の機会をみすみす捨てていたことに気付いて後悔する者。とはいえ彼らも軍人である。すぐに隊長から命令が発せられ、各車はそれに従ってなんとか砲撃による弾幕を張りつつ後退を試みる。

弾を撃ちながら必死で後ろに逃げる戦車の姿はクラファアの悪戯心をくすぐるものだだったが、その加速は彼女が思っているより早い。三台目を捕まえたところで既に手の届く範囲に戦車はなくなっていた。

(ま、元々要るものじゃないし、仕方ないか)  
クラファアはそう考え、追いかけてまで捕まえるのは諦めることに決めた。

改めて捕まえた戦車を見ると、砲台を回したり左右のキャタピラを独立で回したりといういろいろ動かししている。既に弾を撃ち尽くした彼らにとつては精一杯の抵抗なのだが、クラファアには自分を嫌っている小動物が胴を捻っている姿と重なって見える。

「可愛い♪」

笑みとともに、彼女の口からそんな言葉が漏れる。ここまで

必死に藻掻いているのだから、彼らに何かしてあげても良いように思えた。少しの間考えた後クラファアは一端戦車を地面に下ろして指で押さえ、こんな提案を持ちかける。

「戦車の人はみんな外に出てきて。そうしたら放してあげる」

いきなりの提案。戦車内にいる車長・砲手・操縦手の三人は何事かと顔を見合わせる。

「でも、もし出てこなかったら……」  
続けて出る言葉と共に、前面の装甲が音を立てて軋み始める。もはや猶予はない。車長は砲手と操縦手を一瞥して頷くと、ハッチを開けて一気に外に出る。

車長の視界に入ったのは、溢れんばかりの陽光と、遙か上から見下ろしている巨大なサンタ娘だった。小さなペリスコープから見ると違って、周囲の風景と一緒に写る巨大サンタ娘は背景からの逸脱が一層際だって見える。

(俺はこんなのとやりあっていたのか……)

視線を落とすと赤と白の壁面にしか見えない。それくらいに巨大なサンタ娘を思わずぼーっと見上げてしまう。だがそう悠長に見とれている場合でもない。

「さ、早く降りて」

「車長、早く我々も出してください」

上下から急かされて我に返った車長は、慌てて砲台脇の梯子を下りる。ついで砲手と操縦手が、サンタ娘の巨軀に驚きつ

つも外に出て戦車から離れる。

「もう人は居ないわね？」

クラファはひとまず尋ね、兵士達が頷くのを待つてから再び戦車を掴んで袋に入れる。そのあまりにもあつさり扱われていく様を、彼らは呆然と見ているしかなかった。

(あれつて、五十トンくらいあるよな……)

かくして準備が整った駅員を肩に乗せたクラファは、思わぬ収穫もあつて上機嫌なまま車両倉庫に向かう。線路をまたぐようにして歩いているので、脇の道には三十メートルおきに彼女の足跡が残っている。

「瞬間移動とか、なんかそんなことはできないのかい？」

このサンタ娘が突然現れたことを思い出した駅員は、そばにいる彼女に聞いてみる。その問いにクラファは歩みを止めるが、すぐに何事も無かったかのように歩き出しながら応える。

「新人だから、社会勉強の一環としてあまり使うなど言われているの」

なんともはた迷惑な話に、駅員は苦笑するしかなかった。

かくして車輛庫まで数キロメートルに渡つて線路沿いの道に彼女の足跡が残ることとなる。もつとも、彼女の大ききからすれば『その程度の被害で済んだ』とも言えるわけだが。

「ありがとう。じゃ、ここで下ろすからね」

一方的にそう言つて、クラファは駅員をそつと地面に下ろす。そして車輛庫の様子をざつと伺つてみるが……

架線が蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

この線を切つて地面に落とすと電車が動けなくなるらしいから、どうにか引つ掛けないように電車のあるところまで行かなければならない。しかも黒い線に焦茶の砂利だから、上からだとは非常に見え辛い。

(まいったなあ……)

困惑したクラファは改めて周りを見渡すが、漫画で見たワイヤートラップのような架線に抜け道は見つからない。彼女は再び先の人を頼ることにした。

傍迷惑な仕事もやつと終わつたと腕を伸ばしながら歩み去る駅員の目の前に、突然重い音と共に赤い壁が落ちる。驚き飛びのいた駅員は砂利の上でバランスを崩しそうになるが、壁の一部が分離して彼の背中を支える。壁の間からはぼつこの悪そうなサンタ娘の表情を見ることができた。

「ごめん、もうちょっと手伝つて欲しいんだけど……」  
こうして不幸な駅員は、何両もの車輛をひっくり返していく巨大サンタ娘の『選定』の様子を、彼女の肩口から延々と見させられることとなる。

## 3

電車を集め終えたクラファアは、駅員に礼と詫びを言つて車庫を離れる。

一悶着——いや、三々四悶着くらいは有つたかもしれないが、どうにか収集リストにある品物は集め終えた。初仕事の成功(?)に心踊らせながら、クラファアは携帯電話のようなモノをポケットから取り出して先輩のサンタに連絡を取る。

「あ、どもも、ルーデイさん。クラファアです♪」

「はい……つて、どうしたの今頃?」

携帯越しに聞く先輩の声は、始めは眠気を、その次には軽い驚きを伴っていた。

「え? ああ、実は……品物を全部集めてしまったので、連絡をと思ひまして」

先輩の驚きは予想より早く集めたからだと思つたクラファアは自信たっぷりに報告する。だが携帯の向こうからは、タイムラグとは明らかに異なる間を挟んで質問が返ってくる。

「あなたの回収つて、まだ先じゃ無かつたの?」

「えっ?!」

その指摘にクラファアの思考は凍りつく。それでも直ぐに収集リストを思い出した彼女は、懐からそれを取り出して冒頭の部分を確認してみる。

作戦開始…○×日 ○二…○○(現地時

間)

作戦終了予定…○×日 ○四…○○(現地時間)

終了予定時刻までに回収しきれない場合は、不足分を速やかに連絡すること。

「えーつと、現地時間の二時〜四時つてあつたので、その時間に合わせて来たんですけど……」

またミスしたのだろうかと思ひ予感を感じながらも説明するクラファア。だが、先輩の応答はそつけない。

「ん? いや、だから。それがまだ先つてことなだけで」

「え、えつと……そう、なんですか?」

「あんたね、星によつては地域毎に標準時が違つて教わらなかつたの?」

………

「ああっ!」

思わず上げた叫び声で、彼女の前面にあるビルのガラスが高い音を立てて砕け散つた。その威力に驚き周囲を見渡すクラファア。声の直撃を受けていないビルはヒビこそ入つていないものの概ね無事のようなだ。

「あ、あんたねえ……耳元で大きな声立てないでよ」

ルーデイの不機嫌な声が聞こえる。

「まあ、いいわ。とりあえずそつちに向かうから、待つてなさい」

「は、はい……」

先程の自信はどこへやら、返事するクラファアの声は既に力を

失っている。

「まあ初めてつてこともあるし、そんなに被害出してなければ大丈夫だから。ね？」

軽くフォローを入れてルーディは通信を切る。

だが、その科白でクラファは深夜に色々集める理由が被害を最小限に留めるためであることと、今まで自分がしてかしたことを思い出した。寸断した高速道路とか、ガソリンスタンドの火事とか、転んだこととか……。先輩が来る前に何とかしなければならぬ。

そう思つて駆け出すクラファにいきなり着信が入る。発信元はさっきのルーディ先輩だ。

「は、はい先輩。何でしょう」

「あんた、いま動こうとしたでしょ」

単刀直入にルーディは低い声で言った。いきなり鋭い指摘を受けてしまい、クラファは「いえ、あの……」としどろもどろにしか応えることしかできない。

「あのさあ。端末で位置が解るつて、あんた聞いてなかったの？」

もはやルーディの声は呆れている。

「自分で何とかしようなんて考えちゃだめよ、あんたドジなんだから。いいわね!？」

「はあい……」

行動まで見透かされてしまったては、もう大人しくするしかない。

い。クラファは力のない声で応えた。

「それから。端末置いてどっかに行こうなんてのも、考えちゃだめよ？」

(いや、そこまでは考えていませんつて……)

反駁の言葉が喉まで出かかったが、彼女はそれを飲み込んでまた力のない変事をした。

携帯を再び懐に仕舞つてから、クラファはさつき窓が砕けたビルの中をのぞき込んで見る。最初はやがんで上層階を、そして身を屈めて下へと。最後には座つて頭を擦り付けた姿勢でどうにか一階の様子を伺うことができる。

幸いにして、ビルの中に人は残っていないようだった。クラファは座つたまま四つ辻を占領し、先輩の到着を待つ。

先輩が来るまでの間、彼女はこのことをどう言い訳するか、そしてルーディ先輩が怒つてたらどう謝るかを考えていた。

日はまだ高い。初仕事だというのに、今日は長い一日になりそうだ……。